

雪しろき奥嶺があげし二日月

藤田湘子

「馬酔木」の水原秋桜子選で初巻頭をとった四句のうち的一句。第一句集『途上』の冒頭に置かれた、いわば俳人湘子の出発の句である。昭和二十二年一月「馬酔木」復刊記念会で、はじめて秋桜子に会った夜の作。

昭和五十七年に現代俳句協会から刊行された『朴下集』の「秋桜子先生と私」の中で、「馬酔木の句会に初めて出、秋桜子先生の警咳に接したという感激が、句作に好影響をもたらしたことはまちがいない」と自ら記している。この文章は、青年湘子が師に初めて見えた時の興奮が手に取るように分かり、何度読み返しても胸の高鳴る思いがする。それは丁度、私が湘子先生に初めて会えた、その時の思いが、そのままそこにあつたのだ。

1947年（S22作） 第一句集『途上』 鑑賞・野本京